

げんぺいぬのびきのたき

源平布引滝

〔解説〕

寛延二年（一七四九）大坂竹本座初演。並木千柳、三好松洛による五段続きの時代物です。平治の乱以後、再興を期す源氏の武将らを中心に人々の思いが複雑に絡み合つて描かれています。源義朝の弟義賢の最期を描いた二段目「義賢館」、平家方なれども源氏再興を密かに願う者達を描いた三段目「九郎助住家」がよく知られています。

〔あらすじ〕

平治の乱で源氏を破つた平清盛は、源氏の再興を恐れて一族の男子を根絶やしにせんと躍起になります。木曾義賢から源氏の白旗を預かつた小万（こまん）は、平家の兵に追われて琵琶湖に飛び込みます。溺れかかるところを、平宗盛の船に助け上げられますが、源氏方の女と露見して白旗を奪われそうになります。船に乗り合わせた斎藤実盛（さいとうさねもり）が旗を持つ小万の腕を切り落とし、白旗は小万の腕もろとも流れて行きます。

義賢の妻葵御前が身重であったことから、葵御前を匿う九郎助のもとにまで詮議が及びます。平家家臣の斎藤実盛と瀬尾十郎(せのおじゅうろう)が、葵御前から生まれた子と見せられたのは、女の腕でした(実は九郎助の娘で、源氏方多田藏人の妻である小万の腕)。もはや逃れられない状況でしたが、実盛が唐の国の故事を引き合いに出してその場をしのごうことができました。

〈実盛物語の段〉

葵御前が生んだという腕が、九郎助夫婦の娘・小万の腕であると知った実盛は、小万の腕を切り落とした際のいきさつを物語ります。そうするうちに葵御前は後の木曾義仲となる男子を産みます。そして陰で成り行きを窺っていた瀬尾十郎が再び姿を現すのですが、小万の遺児太郎吉に討たれます。瀬尾は小万の実の父であり、孫に手柄を立てさせ、生まれたばかりの若君の家来をなれるようわざと手にかかったことを告げて息絶えるのでした。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

実盛物語の段

泣き出す心根を、思ひやつて実盛。

「さてはその方達が娘よな。聞きもおよばん宗盛公、竹生島詣で下向の御船、勢田、唐崎の方へ漕ぎ出すところ、矢橋の方より二十あまりの女、口に白絹を引つくはへ、ぬき手を切つてさつ／＼と、浮いつ沈みつ遊ぎくる。『アレ助けよ、アレ殺すな』と、舷叩いてあれれども、折柄比叡の山嵐柴舟の助けもなく、水に溺れる不憫さに、三間櫂を投込んで、念なう御船へ助け乗せ、『コリヤいかなるものぞ』と尋ぬるうち、追手と見えて声々に『その女こそ源氏方、白旗隠し持つたるぞ。奪ひ取れ／＼』と呼ばはる声を聞きしより、船に居合はす飛弾ノ左衛門飛びかゝつて『もぎ取らん』、『イヤ渡さじ』と女の一念。『もしや白旗平家へ渡らば、

末まで源氏は埋れ木。女が命にかえられず』と、白旗持たる肘をば、海へざんぶと切り落し、水底へ沈みしと、船を汀へ漕ぎ戻し、骸は陸へ上げ置きしが、廻り廻つてこのうちへ白旗もろとも帰りしは、親を慕ひ、子を慕ひ、流れ寄つたか不便や』と涙交りの物語。

「三人かゝつて放さぬ白旗、心よう放したは、わが子に手柄させたさか。死んでもそれほど可愛いか。手にとどまつた一念がものいふことはならぬか」

と御台もろとも取りすがり、泣くよりほかのことぞなき。実盛始終手をこまねき、人々の愁歎に涙と浮かむ一工夫、思ひついて傍に立寄り、

「かく甲斐々々しき女、たとへ片腕切つたりとて即座に息も絶えまじきが、白旗を渡さじと一心腕に凝りかたまり、五臓に残る魂なし。再び肘を接合はさば、霊

魂帰り息することもあらん。誠にかの眉間尺が首、三日三夜にられても凝ったる一念恨みを報ぜし例しもあり。今この肘に温りあるも不思議、または御旗の威徳も」

と切つたる肘に白旗持たせ、

「ものは試し」

と接合せば、わが子を慕ふ魂魄も御旗の徳にや立帰り、息吹返し目を開き、

「太郎吉どこにぞ。太郎吉」

といふに、びっくり、

「ヤレ蘇生ったわこゝにゐる。こゝに」

「こゝに」

と取継る。

「ナウ御台様。白旗はお手に入ったか。太郎吉にたった一言いひたいことが」

とばかりにて今ぞはかなくなりけり。

「ヤアコリヤ小まんよ」

「コレくくく小まんナウ」

「小まんやいく。ハア可愛やくくくくな。生返つたがなほ思ひ、あんまりこれは胴慾な、ほいない別れ」

と取付いて『わっ』とばかりに泣きゐたり。ともに悲しむ葵御前。たゞならぬ身にせきのぼす、五臓の苦しみ御産の悩み、実盛驚き、

「ヤアコリヤ夫婦の者。泣いているところでなし。御台は産の悩みあり、いたはりもうせ」

と一間へ伴ふ間もなく、用意の屏風引廻し、お腰抱くやらはやめやら、祖父祖母おじうばが介抱に、心利いたる実盛がかの白旗を押立つれば、実にも源氏を守りの印。若君安々御誕生初声高く上げ給ふ。父義賢の稚名をすぐ

に用いて駒王丸、後に木曾ノ義仲と名乗り給ひし大将は、この若君のことなりし。いつの間にかは瀬尾ノ十郎、小柴垣より顛れ出で、

「ヤアそりやならぬ〜。かくあらんと思ひしゆゑ、死骸を持たせて窺ひ聞く。義賢が倅男子とあれば見遁しならず。いで受取らん」

と駆入れば、実盛やがて立ちふさがり、

「ア、これ〜瀬尾。貴殿も生通しにもせまい。海とも山とも知れぬ水子、見逃しやるが武士の情」

「ヤアいふな実盛。さては汝二心な。じたいこのくたばった女めが、白旗奪ひ取つたるゆゑ、平家方は夜が寝られず。思へば思へば重罪人め」

と死骸を立蹴にはつたと蹴飛ばし、

「サア生れたがきめ渡せ〜。異議におよぶとなで切り」

と飛んでかゝるを太郎吉が、母の譲りの九寸五分抜くよりはやく瀬尾が脇腹ぐつと突いたる小腕の力。『これは』と人々驚くうち、しばらくあつて瀬尾ノ十郎。

「なんと葵御前。これで太郎吉は駒王殿の御家来にならぬがの。初めての御家来に平家の縁と嫌はれては、娘が未来の迷ひといひ、一生埋れる土百姓。七つの年から奉公せば、木曾の御内に一といふて二のなき家来。取りなし頼む〜実盛殿。サア瀬尾が首とつて、初奉公の手柄にせよ」

と非道に根強き侍も、孫に心も乱れ焼き。すらりと抜いてわが首へ、しつかと当て、両手をかけ、

「えい〜〜」

と引落す。難波瀬尾と平家でも悪に名高きその一人最後はさすが健気なり。夫婦も泣く〜その首を太郎に持たせ御目見得。葵御前は若君抱き、

「初めての見参に平家に名高き侍を討取つたる高名、主従三世の奇縁ぞ」

と仰せを聞くより太郎はつつ立ち、

「サアこれからおれは侍。侍なればかゝ様の敵、実盛やらぬ」

と詰めかけたり。

「ホ、ホ、あつぱれ〜。さりながら四十に近き某が、稚き汝に討たれなば情と知れて手柄になるまい。若君ともろともに信濃の国諏訪へ立越え、成人して義兵を挙げよ。その時実盛討手を乞受け、故郷へ帰る錦の袖ひるがへして討死せん。まづそれまではさらば〜。

いづれもさらば。家来ども乗りがへ引け」

と呼ばはれば、『はっ』と答べて月びたひ、栗毛の駒を引出だす。手綱おっ取り乗るうちに、いづくに隠れりたりけん、矢橋の仁惣太踊り出で、

「ヤア先だつて注進の褒美を無にしたそのかはり実盛が二心で駒王丸を北国へ下す段々直ぐに注進。詞つがふた争ふな」

といひ捨て、駈出す。実盛すかさず馬上より、用意の鎌縄打ちかくれば、首にかゝつてきり〜。引寄せ引上げ引掴み、

「あつぱれおのれは日本一の、大欲無道の曲者め」と鞍の前輪へ押付けて、首かき切つて捨て〜。その後手塚ノ太郎、母がかたみの小合口、金刺取つて腰にぼつ込み、綿繰馬にひらりと乗り、

「ヤア〜実盛。かゝ様殺して逃ぐるかいぬか。もうおれが名は手塚ノ太郎、コリヤこの金刺の光盛なり。いなずとこゝで勝負々々」

と呼ばはつたり、

「ヲ、出かした〜。蛇は一寸にしてその氣を得る。

自然と備はる軍の広言、成人して母の怨、顔見覚えて恨みを晴らせ」

「イヤ／＼もうし、孫めが大きくなるうちには、そこもと様は顔に皺、髪は白髪でその顔かはる」

「ム、ム、ム、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、なるほど、その時こそ鬢髭を墨に染め若やいで勝負を遂げん。坂東声の首取らば池の溜りで洗ふて見よ。軍の場所は北国篠原、加賀の国にて見参々々」

「げにその時にこの若が、恩を思ふて討たすまい」

「生きながらへてをったらば、この親父めが御旗持」

「兵糧焚くはわたしが役」

「首切る役はこの手塚」

「ヲ、ヲ、互ひに馬上でむんずと組み、両馬が間に落つるとも、老武者の悲しさは、軍にしつかれ、風にちぢめる古木の力もおれん。その時手塚」

「合点々々」

「ついに首をもかき落され、篠原の土となると名は北国の街に上げん。さらば」

「さらば」

と引別れ、帰るや駒の染手綱、隠れなかりし弓取りの名は末代に有明の、月もる家を後になし駒をはやめて立帰る。